

平成30年度厚生労働科学研究費補助金（統計情報総合研究事業）  
（分担）研究報告書

死亡・死因に関する情報の収集とその流れおよびデータ分析に関する国際比較

研究分担者 宮武 伸行 香川大学医学部 准教授

研究要旨

本研究では、死亡診断書（死体検案書）による死亡・死因に関する情報の収集とその流れおよびデータ分析に関して、諸外国の死亡診断書様式、中央集計に至る情報の流れ、電子化の進捗状況について調査、比較する。さらにその過程で、わが国の死因統計にみられた現象について考察する。

調査の中で、特に「老衰」について注目した。わが国では近年、人口の高齢化に伴い増加傾向にあるが、ヒアリングを行った国々での傾向について確認したところ、特に増加傾向はなく、国による傾向の違いがある点が興味深い。この点については、関与する要因や理由についてもさらに詳細な調査を進める必要がある。

A. 研究目的

死亡診断書（死体検案書）による死亡・死因に関する情報の収集とその流れおよびデータ分析に関して、諸外国の死亡診断書様式、中央集計に至る情報の流れ、電子化の進捗状況について調査、比較する。さらにその過程で、統計データに関して調査を行った。

B. 研究方法

本研究では文献調査と研究対象国の担当者へのヒアリングを中心に調査をすすめた。具体的な事項としては、死亡診断書様式、中央集計に至る情報の流れ、電子化の進捗状況について調査した。特にその中で、わが国では近年、人口の高齢化に伴い増加傾向にある「老衰」について調査を行った。

（倫理面への配慮）

死因統計システムや人口集団に関する研究であり、個人情報や個人が特定できる内容は含まない。研究対象者に対する人権擁護上の配慮、不利益・危険性の排除や説明と同意については、ヒトを対象としないので該当しない。

C. 研究結果

各国における中央集計に至る情報の流れについての調査の過程で、老衰に関する事項についても併せて調査した。文献調査ではすでに、アメリカでは、死因としての老衰の少な

いことが報告されている。また、ヒアリングにてドイツでは近年の急激な増加の傾向はみられないようである。韓国では、かつては老衰が多かったものの、現在はそのような傾向はないとのことである。

D. 考察

死亡診断書、死体検案書は人間の死亡を医学的・法的に証明する書式である。その記載事項は、わが国の死因統計を作成する際の資料となる。

死因統計は、わが国の保健衛生行政や社会的にも広く活用されており、保健衛生政策を実施していく上での基盤データのひとつである。近年、死因としての老衰の増加が注目されている。

今回の検討で、いくつかの国における状況を比較したところ、初年度に調査を行うことができた国・地域は多くないが、わが国のような目立った変化はみられていない。その点からは、老年人口割合が上昇しているわが国特有の事情が関与することが示唆される。

すでに指摘のあるところではあるが、定義の曖昧な点も含め、この点については注目していく必要があると思われる。

E. 結論

今回調査した老衰については、各国とも増

加したという報告はなく、わが国特有の事情が関与することが示唆される。しかしながら、関連する要因については国内の要因みならず、今後も併せて海外の動向にも注意を払う必要がある。

F. 健康危険情報

該当なし。

G. 研究発表

1. 論文発表

宮武伸行, 田中直子, 鈴木裕美, 木下博之: 東京都における火災件数、死亡者数、負傷者数の月別比較および気温、湿度との関連. 地域環境保健福祉研究. 21; 10-13, 2018.

2. 学会発表

なし

3. 関連した実務活動

なし

H. 知的財産権の出願・登録状況(予定を含む)

該当なし。